
1999
ノストラダムスの
大予言
Catastrophe 1999

前略。
久しぶりに、大自然のふところに
抱かれてきました……



身近に感動ある日々を。

ちかごろ、小さなことにでも感激する心が忘れられているような気がします。自然とふれあったり、音楽に心ゆさぶられたり、もっともっと感激ある日々を大切にしようではありませんか。日本鋼管は身近な生活にゆたかさを広げています。

人を豊かにし
人と人の語らいを実らせ
人と自然を身近にする

製鉄　重工　造船
NKK 日本鋼管
東京・丸の内 TEL代表(212)7111 〒100

事業所
京浜製鉄所　川崎市川崎区南渡田町1番1号〒210
福山製鉄所　福山市鋼管町1番地　〒720
鶴見造船所　横浜市鶴見区末広町2丁目1番地〒230
清水造船所　清水市三保387番地の1 〒424
津造船所　三重県津市雲出鋼管町1番地〒514-91

●NKK提供番組　テレビ「度胸時代」東京放送 ほか23局ネット 日曜日 PM10：00～10：30　ラジオ「世界のマーチ」東京放送 ほか10局ネット 月～金曜日 AM6：35～6：45

文明とは何だろう

監督　坂野義光

西アフリカで五百万人が餓死！
ニジエールでは人口の三分の一が死亡！
などという話は、実際に現地に行ってみるまではどうしても実感としてピンと来なかった。

一九六八年以来旱魃のため毎年十八粁も南下しているといわれるサハラ砂漠の南側では、百パーセント家畜を失った村人や遊牧民が、水と食糧を求めて南へ南へと旅を続け、ニジエールの主都ニアメイの周辺にはいくつもの難民キャンプが出来ている。彼等は、破れたヒツジの皮を張り合わせた粗末なテントの下でひしめき合いながら、週一回の僅かな赤十字の救援物資でかろうじて露命をつないでいる。ナザレというキャンプの人々は、二千粁もの砂漠を三月かかって歩いて来たという。出発した時には三千人いたのが無事たどりついたのは千人だけ、実に三分の二が飢えと疲労で倒れ砂漠の土と化してしまったのだ。ツアレグ族のマイガというおばあさんからその話を聞いた時、国の人口の三分の一が餓死したということの悲惨さが、具体的事実としてのしかかって来た。

マイガは、四日間何も食べていないというのに、一言も愚痴をこぼさないし、ものをくれとも言わない。逆に、炎熱にあぶられた顔の黒い瞳をうるませて、昔のように羊をつぶしてお前にご馳走してやれないのが大変悲しいという。その言葉を聞いた時、この老婆の驚くべき心のやさしさに触れて愕然とした。マイガが書いてくれたたどたどしいタマシェック語の別れの文は、今でもノートの片隅に残っている。

厳しい自然に耐えて生きる強固な存在感と、人間としての暖か味——文明の利器一つない荒野で素晴らしい文明人にめぐり会った思いがした。

ニューギニアでは、ポートモレスビーからゴロカへ飛んだ。ゴロカ周辺では、車の前方に大ブタ小ブタがやたらと出没する。もしブタを轢いたら一目散に逃げること、さもなければあなたは叩き殺されると、出発前にカンタス航空の人に言われていた。現地人はそれ程ブタを大切にしている。ブタ二頭と五十ドルあれば嫁さんが貰えるという。女たちは、同じ小舎でブタと寝起きしている。その現象だけを見て非文明的だといいきれるかどうか。

西部山岳地帯では今でもペニスケース一つで暮している種族がある。白人の探検家が真似をして一糸纒わぬ姿でつき合おうとしたら、たちまち捕えられて送還されてしまった。

彼等にとってペニスケースはタキシードにも匹敵するものだったのだ。

アフリカでもそうだったが、ニューギニアの現地人たちは実に親切で人なつっこい。対等につき合えば実に気分のいい連中だ。彼等は彼等なりに長い文化の歴史と誇りを持っている。

人間味から言ったらいわゆる文明人よりも遥かに豊かなのではなかろうか。

荒廃した現在の日本の精神風土を思う時、いわゆる未開人の生きざまのなかにこそ我々が学ぶべき多くのものがあるように思われる。

（筆者は「大予言」海外ロケ監督としてニューギニア、アフリカを訪問）

アフリカ　マリ・トンブックー近郊をラクダでロケハンする筆者 ▶





▲ニジェール　アガンデス近くの遊牧民部落。見渡すかぎりのかつての河が干上っている



◀ニューギニア　ゴロカ近郊にて現地人の心やさしい人々と共に

昭和49年 8月 2日印刷
昭和49年 8月 3日発行

Ⓒ　発行所　東京都千代田区有楽町1ノ14　東宝株式会社事業部
発行者　東京都千代田区有楽町1ノ14　大橋雄吉
印刷所　東京都港区芝2－1－28　成旺印刷株式会社
定価 200円

異常気象で原子力発電所大爆発！

色、煙、爆発力、火炎とそれぞれ異なる性質を持つ火薬を調合して、魔法ビンにつめ、ミニチュアの下にうめる。爆発と同時に強風も送り込んでビルや木造建築を一瞬に吹き飛ばす。これとは別に撮影した光、煙、大気の移動、キノコ雲、たつ巻き等をオプティカルプリンター〔合成機械〕で合成する。わずか三〇秒のこのシーンにしめて二千万円也。

地球が凍る！氷河期が目前に

地球に充満したスモッグは太陽光線をさえぎり、地表の温度が急激に下り出す。南海は突如氷結し、客船は海に釘づけにされる。氷河期に入る地球の前兆である。

寒天の海に発泡スチロール、二十五トンもの氷を運び込み、一部のスタッフは連日かき氷の製造に精を出す。それをステージに散らしたが、どうも質感に乏しい。そこで雲母をちりばめて本物らしくなる。然し突然の気象変化だから当然濃霧も発生する。これは熱湯をかけたらたちまち濃霧が発生。これをクレーンで撮影する。やっとO・K。準備一ヶ月、撮影に三週間、しめて経費二千万円なり「大予言」とはお金のかかるものである。

〝恐怖の大王が降ってくる〟

地球最後の日は、世界的な食糧危機に端を発した某国同志のミサイル戦争で、ついに地球は自滅の日を迎えるという設定。

千五百平方メートルのステージに砂漠と山岳地帯、ミサイル基地をミニチュアで作る。ミニチュアのミサイルといっても、全長二米というからちょっとしたロケット並み。

このミサイルを三〇発用意、リハーサルのあと六本が本番で発射された。

スタッフが発射ボタンを押すと、内部の特殊火薬が爆発。ミサイルはズズーンとにぶい発射音と共にゆっくり上昇、ピアノ線の弾道に乗ってスピードを上げる。スタジオは発射するミサイルと敵陣から打ち込まれたミサイルの煙でもうもう。

人類の終末を告げる大事な場面だけに費用も三千五百万円という大規模なものだった。

黒沢年男 由美かおる 愛の儀式

〝和製モンロー〟とは由美かおるの愛称だが、彼女はこの映画で、滅びゆく人類の運命に逆らい、子供を産む決心を固め、澄みきった月光の海辺で、変人のカメラマン・黒沢年男と荘厳にして熱烈な愛の儀式をする。

『同棲時代』で強烈なヌード美を見せた彼女が『しなの川』に続いて三度目のラブ・シーン。撮影は軽いキス・シーンから始まり、二人が結ばれるまで、延々六時間。

「とにかくきれいな肌ですね。びっくりした。由美ちゃんがピンナップNo.1のゆえんが納得出来ました」と黒沢年男が感激すれば、日活時代『夜の薔薇を消せ』で由美かおるを演出した舛田監督は、

「あの頃はまだ十六歳であどけなかった。よく成熟した女の魅力を出せるほど成長したね」しきりに感心。

一方、彼女は「もう三回目だからハダカにはナレたろうっていわれるけれど、ハダカには出来たらなりたくない……とっても恥ずかしいの。いつまでもかわいい女でいたい」という。バレエで鍛えぬいた1メートル58、86・57・88の美事な肢体を毛布に包んで本当に恥ずかしそうだった。

でも、彼女の役はバレエ教室の先生。二人の愛を謳う幻想的なバレエ・シーンや子供たちにレッスンをつける由美ちゃんは、得意の踊りを楽しそうに踊っていた。



◀原子力発電所の爆発。もし現実だったら……身の毛もよだつ一瞬。



に仕掛けたプロパンガスの熱で、みるうちに干上ってゆく沼地▶



▲由美さんのまばゆいばかりの裸身に黒沢くんもボーッ。



地球を死の星にするな！
今こそ人類の英知を！

『日本沈没』〔小松左京著〕を映画化して大ヒットを飛ばした田中友幸プロデューサーは、一九九九年七月——あと二十五年後に迫った〝大予言〟の言う人類滅亡の日にヒントを得てこの強烈なベスト・セラーの映画化に乗り出したが、さて、この予言集にはシナリオ執筆に必要なストーリーがない。ストーリーがないから、これから起こるであろうと予測される現象の資料的裏づけが大変。

このため、スタッフは「日本沈没」でも試みたように、学究者の協力を仰ぎ、二十数時間に及ぶレクチャーを受けて、作業の万全を期した。

田中友幸プロデューサーは

「一九九九年に人類が滅亡するということにはこだわらない。先生たちの研究されている科学的データーを集めると、一九九九年どころか、それまでに人類が滅亡する可能性さえあるんです。人間の犯した罪悪の報いでしょう。滅亡の要素には、①超化学スモッグ②ミサイル戦争③すい星などによる天体の衝突による地球の消滅等が挙げられますが、このうち、人間が欲望のために自然現象の破壊を行い、そこから起こる異常気象、公害、汚染などを中心に〝人間はこれでいいのか、いまからでも遅くない、英知を集めて人類の未来を守ろう〟という警鐘にしたい。といっても、映画そのものは娯楽ですからいい意味で面白い、見せ物にしたい。アッと驚ろく幻想的な場面、恐怖の未来図をお見せします」と語っている。

特撮映画決定版に！
張切るスタッフたち

この映画は大特撮映画だけに、準備もお金も日本映画ではケタはずれ。「日本沈没」の製作費を上廻る六億五千万円。そのうち特撮だけに二億五千万円が使われている。「なにしろ、〝日本沈没〟と違って人類の経験したことのない現象を表現するのだから大変です。水爆実験でもするような慎重さを要しますね」とは中野昭慶特撮監督の弁。

苦心の特撮場面の撮影をステージからひろって見ると——

「寒天」総動員の〝赤潮襲来〟

東宝の撮影所で一番大きい第九ステージ半分〔八百三〇平方メートル〕に作られた赤潮の海。この原料はヨーカンにして実に七〇万本分に相当する寒天である。この寒天探しにスタッフは東京中を走り廻った。この寒天を溶かしてステージ一杯に流し込み、スプレーでブルーと赤かっ色で吹きつけて完成。文章に書けば簡単な一シーンも、わずか二、三〇秒の画面に特撮スタッフ八〇人が一週間もかかる汗みどろの苦心がひそんでいる。


▲明日は本番！丹精のミニチュアが一瞬に破壊される。点検する中野特撮監督。


▲由美・黒沢に演技をつける舛田監督。「由美ちゃんも上手になった」と感心。


丹念に丹念にスタジオに氷海を再現する特撮グループのスタッフたち▶





だが、神ならぬ身の人間、万能ではない。

むろん、ノストラダムスにしても万能ではない。そこから科学による予言ではおおいきれない予期せざるもの、人知をはずれた予想外なものが生じるスキができる。そういうものを一まとめにして、超科学現象とよぶのである。今の科学のワクを越えたもの、あるいは今の科学の限界を越えたものという意味にほかならない。

とはいいながら、そうした現象はけっしてただのSF的空想ではなく、すべて実際に起こった出来事としてちゃんと記録されているのであって、近年、じょじょに増加の傾向にある。

そのいくつかの例をあげれば、近ごろ火山脈のとおってないはずの東京の地下のあちこちから四〇度の温泉?が噴きだしたり、奥多摩の青梅では樹齢三百年のケヤキの木が夜な夜な気味悪い声をだして泣いたり、また、赤道直下のマレーシヤでは太陽が三つ現われるという空中怪現象の一種が起こった。

これらの怪現象がいったい何を暗示するのか。まだよく判っていないにしても、今まで長い間生きてきた私たちのまわりの大地、空、植物などに、なんか大きな異常が生じはじめた徴候であることは否定できないようだ。

そうした今までの科学の予例からはずれた異常現象のいくつかを、この映画の中でも取り入れているが、それが一見、いかに荒唐無稽に見えようとも、すべて、れっきとした事実に基づいているのであり、今後とも実際に、あるいはむしろもっと大規模に起こりうることだということを、ここにあらためて強調しておきたい。

問題は、いつ、それが起こるのかということだ。

しかしながら、そうした正確な期日の予言となると、残念ながら科学はほとんどお手上げというほかはない。それができるのは否応なく一つしかないのである。科学的にはまだ神秘の領域にとざされているが、その存在は確認されている人間の不思議な超能力「予知」の力だ。

日本でも昔から虫の知らせとか、不吉な前兆とかいわれる予知のふしぎが知られていたが、最近では、これを実験的に超心理学とよばれる学問にように研究している。

アメリカのデューク大学、J・B・ライン博士が中心となり、人間だれにでも潜在するという神秘な力ESP〔Extra, Sensory Perceptionの略、超感覚知覚〕の能力を調べるのだが、その力のあらわれのひとつとして、未来に起こる事を前もって知る力――予知能力のふしぎを研究しているのである。

そんな力がはたして人間にあるのか、という人には、アメリカの有名な水晶占い師ジーン・ディクソン夫人のケネディ大統領暗殺事件予知の例を挙げよう。

夫人はじつに十一年前、まだ若きケネディが大統領に選出される前から、その運命の死をくり返し予言していたのである。

一九五二年雨のそぼふる日。教会で、ホワイトハウスの上にとけ落ちる数字〃一九六三〃の幻を見、この年選出される若い民主党大統領は死ぬという幻聴を聞いた。

一九六三年夏、棺がホワイトハウスにかつぎこまれる幻を見、国葬で帰ってくると予言。

一九六三年十一月二十日。この時はじめてケネディ大統領が狙い射ちされて死ぬことがわかった。テキサス旅行を中止するよう電話したが、出発したあとだった。

一九六三年十一月二十二日、暗殺の当日「今日、あれが起こる」と友人につげた。

まったく見事なESP予知というほかない。

はたしてノストラダムスも、こうした超能力的予知の力によって、二十世紀の諸事件やらその壊滅的な世来末を予言したのだろうか。

ノストラダムスが当時、占星術師であり、医者であり、そして科学的素養が豊かだったことは知られているが、同時にESP的な予知能力に恵まれていたかどうかは、今だ明らかでない。



科学と予言

前衛科学評論家
斎藤守弘

これはノストラダムスの予言の秘密に関係することなのだが、じつは私自身、しばしば予言者あつかいされて閉口するのである。

どういう事かというと、某月某日、拙宅を訪れた某大学の学生に迫られた。

「ぜひとも、ご秘蔵の予言機械を見せていただきたい。たしかにあるはずです。隠さないで、ぼくにだけ見せてください」

てんからそう思いこんで三時間もねばられたのだから、マイッタ。

勿論、そんな機械はあるはずがない。といっても、少なくとも私自身は所有してないというだけのことで、たとえばアメリカ最大のシンク・タンクの一つであるSRIなど、ひそかに巨大コンピューターによる「予言機械」の開発をすすめているとか。そんな噂を耳にしないでもない。

昨今のような一寸先は闇の世の中。実際にそんな超機械があるのなら、それにすがりたくなるのも、なるほど人情だろうが、ともあれ、もっかのところは嘘も隠しもなく、そんな重宝な機械を私は所有してないのである。

では、なぜその大学生は、そんな妄想をいだいたのだろうか。

一つには、私の書き散らす文章にも責任があるのかもしれない。なぜかといえば、あまり時流にとらわれない私自身のナマの想念を述べることにしているからだ。

その時々の時流と思われるものは、じつは本当の時流でなく、私にいわせれば二、三年前の、あるいは五、六年前の社会の深層の心理がようやくあらわれ表面化したにすぎず、現在はすでに、それとは違った方向のべつの社会的深層心理がうごめいているはずであり、それさえ誤りなくつかめば、今後二、三年、あるいは五、六年先にどんな社会変化、世相のハプニングが起こるかを、ある程度、正確に予言できるはずなのである。

つまり、私が予言者と勘違いされるのは、どうやら生きた社会のこの深層把握からくる前衛性のせいらしい。思うに、おそらく四百年前の近代の夜明けの頃に生れたノストラダムスも、これと同じ手法を用いて、その神秘的な大予言をおこなったのではなかろうか。

近代の夜明けの頃に生れたからこそ、後の世のだれよりも深く、近代社会を生みだし、つき動かすその深層心理、その長所と欠陥をすみずみまで知悉していた。そして、その認識にもとずいて、世の中を不断に生成していくその原理を未来に向かって展開することにより、二十世紀における二度の世界大戦、独裁者ヒットラーの滅亡、原子爆弾の投下、宇宙開発の始まりなどを、はなはだ大雑把にだが、予言できたといえなくもない。

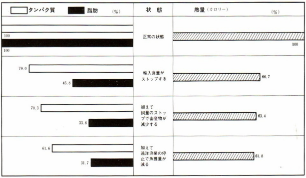
いいかえれば、今日の世につながる近代ヨーロッパの誕生の時代、そこにはらまれる全可能性を分析し、その後の全歩みから終末までをクールな透徹した眼で見ぬいた。

いわば生れたばかりの赤ん坊を見て、その全生涯の運命と死にざまままでを予言するようなものだ。しかし、これはひじょうにすぐれた人間観察眼のある人なら、生れたばかりの赤ん坊からその成人後の運命を予言することはじっさい可能なのであり、たとえば、イギリスでは生れたばかりの赤ん坊の手相をコンピューターにかけて分析することにより、赤ん坊の成人後に患らうその病歴を、ある程度予言できるところまで達している。

そもそも科学とは、そういうものなのである。すべて人間の社会、物質の自然界を含めて、この世のすべてを生みだしている根本のもの、すなわち法則性をさぐりだすことに、その全精力をついやしているのであって、ひとたび「法則」を手にいれれば、少なくともそれに関連した現象の未来は正確に予言できる。

科学の本質はまさしく予言なのであり、ふつう考えられるほど、科学と予言とは相反しないのである。

異常事態が来るとこれだけに減る



あるかどうか。

気候帯の変動は、地球全体に進んでいるものであり、たまたまアフリカが悪化の先取りをさせられているのであるから、日本がそれに無縁で逃げきれるものではない。

現在の異常気象は、その原点までさかのぼると、極地の寒冷化に行き着く。北極の寒気団が張り出せば、その南縁にある極前線帯は南へ押し下げられ、順ぐりに気候帯を赤道に向ってずらされる。

北部アフリカの砂漠が南へ移動してきたのもそのためで、たまたま北側に悪いものが隣接していた不幸な地の住民が不毛の地に急変した故郷を捨て、肉親を切り捨てて南へと落ちのびることになった。

日本は三千年らい、豊葦原のミズホの国となっていたが、その豊富な水分の供給はこの気候帯のズレによって絶たれる方向へ進んでいる。夏場の水補給に役立ってきた台風は、その発生源が高圧帯に変わりやすくなって、めったに来てくれなくなる。台風災害は減るかもしれないが、農産物にとって台風の水が絶たれることは、そのまま旱魃に直結して枯死につながる。

すべての旱魃の周期が重なる一九七五年を中心として、これから数年間の旱害は、おそらく日本の食糧自給率を破壊的なところまで低下させるであろう。世界共通の気候帯変動は、すべての地の生産量を低下させることになり、食糧輸出国は次第に輸出能力を失い、輸入国に転落していく。

四周を海にかこまれ、気候変動にクッションをきかせられている日本に住んでウッカリしているあいだに、食糧を輸出してくれている国はだんだん変調度を増大させてきた。

工業化だけで立国する態度を決めた日本は、農業を安楽死へ追いやって、農村からの労働力を都市工場へ吸収する体質に変容し、そのためには農本主義を根絶やししようと拍車をかけている。食糧自給率を高めようというのはかけ声ばかりで、畑に肥(こえ)はかけられなくなった。

アメリカは気候帯のズレによって大雨の降りやすい地となるが、幸せにも世界では最後まで食糧増産の可能な地域である。かれらは利口にも、これから先の世界制圧には食糧の確保によるのが最良の策であることを自覚し、今までの減反、生産調整政策を大増産型に切りかえた。

ところが今からこれを大々的にやると、さしあたっての数年間は農産物がダブついて打撃をこうむる。その期間、文句もいわずにいくらでも買ってくれる国は、第一が日本だ。日本は自分の食う分を自分で作ることをやめたからだ。そこで農務長官は日本へ売り込みにやってきた。食糧はいくらでも売るから、どんどん買ってほしい。もう二度と大豆ショックのようなことはしないと。そして日本の政・官界は安心しきってしまった。だが世界の飢餓が進行するとき、アメリカはこのときとばかり都合のいい国へ向けてだけ食糧を売りつけていく。

そのとき、日本はもはやアメリカにとって役目を終えた存在となる。いくら高くてもいいから恵んで下さいといってみても、もうお宅へ廻すゆとりはないから、わるく思わんでくれよ、てチョンだ。

売るときは相手に恩をきせて、効果があるほうに重点を置く。助けてやる場合は血縁のつながりが強いほうを優先する。つまりソ連やイギリスへ向けないではすまないわけで、いくら日本がひがんでみても、日本とアメリカとでは血のつながりはゼロに近い。

こうして今から三年もアメリカ頼みで農村破壊を続けると、今でも立ちなおりの困難な日本の農業は、絶対に生きかえることができなくなる。

あのときのアフリカの民の姿が、数年後の、わずか数年後の日本の自分たちの姿そのままであったとわかったとき、もはやかなりの人が悪あがきのできない善人ゆえに淘汰されたあとであり、なぜ早く気がつかなかったのかと後悔のホゾをかむばかり。嗚呼！



プランクトンの大量死による赤潮の発生は漁民たちの生活を破滅させた。



迫り来る飢餓

食生態学者
西丸震哉

日本人が豊かな生活にひたりきっているとき、いくら食物がなくなる心配を叫んでも、いままでほとんど効果がなかったけれども、生活の基盤のひとつである石油が、ごくたあいもなく需給を乱され、それにつれて日常生活に大変動が起こることを身をもって体験させられたあとは、さすがに食糧の危機が出てきたら、石油どころではないたいへんなことになるぞ、という感覚が一般化してきた。

ローマクラブの警告や人口会議の決議などのせいか、人が食糧危機を論ずるとき、それの原点を人口増加と結びつける傾向がある。

だからその危機は二十年も先に出てくる話として身近かなものとなし得ないで、まだまだ大丈夫なのだと安心しようとする。

日本よりも気候の変動を先取りしているアフリカ諸国を見たまえ。あの国ぐにの人口増加はそれこそ爆発的に進行するとされている後進国型のもののはずで、それだからこそ紀元二千年には七十億人の地球人口になると計算されているのだが、現実にはどうか。

土地から水分をぬきとられ、砂漠化が急速に進んで食べるものがなくなっていくと、弱いもの、乳幼児から小児、老人という順序でこの世から消えさせられ、いまや三歳までの子供はひとりも見当らない地域さえも出現しはじめた。

人口増加どころか、ガタ減りがはじまっているのだ。生存環境に変異が起こるとき、それを先取りしたところから順に人口減少がはじまるのが原則であって、今のままでどんどん人口がふえ続け、全体がギリギリまで進んだところでガタッと破局をむかえるというようなものの考え方をしてはならない。

イナゴや野ネズミの異常大発生はそういう形をとるものだが、人間のばあいは部分的に時間をずらせてそれが起こり、地球上に人間がウズをまくまでふえてしまうということにはならない。

ところが現在の人類三十七億というのは、もう現時点でも異常大発生といっていい。

この人間を重量換算すると一億六千万トンになる。自然状態でこれだけふえた動物はかつて一度もなかったほどの量である。

この人間がすべて穀類を食べて生きる動物であるのなら、無水物換算で七億トンの穀類があれば生きていける。現在地球上では十億トン余の穀類を主とした農業生産物が穫れているから、まだかなりゆとりがあるように見られる。

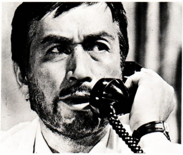
ところが、人間はまずい雑穀を食べたいとは思わず、おいしい肉類をより多く食べようと願望する。そのために重量にして七億トンもの家畜を飼育するようになった。

このうちには、もちろん人間が直接食べることのできない牧草などを食べて、たとえ効率がわるくても人間の口にはいるうまい食物に変わる家畜もあるけれども、文明国で飼うブタのように、人間用として活用できる雑穀をベラボウに食べるものがある。

この家畜を人間に換算すると二十億人分くらいになる。つまりいま地球上には人間の意志で勝手に食べさしているものを加えると、人間が五十七億人ばかり生きている勘定になるわけだ。

人口が六十億、七十億になったら破局というのは、じつは何十年も先のことではなくて、現在がもうその段階になっている。

日本のブタが食べている雑穀は、アフリカの住民に廻されているなら、かれらは餓死しないでもすんだはずのもので、アフリカ住民の死を日本人は遠いところの無関係なできごととして気にもせず、自分のところでは少なくとも当分はそうならないものと信じているが、かれらの食べるべきものを取り上げて、自分のブタにやってしまっているともいえるわけだから、われわれの目の前では食物が奪われ、餓死させられているのが見えないだけのことで、知らん顔をしていられるならば、こう出てきて、[illegible]道主義を口に出せるような[illegible]



人類は自然に還れ

丹波哲郎

『ノストラダムスの大予言』の映画化について、昨年、田中友幸プロデューサーから話があったとき、私は双手をあげて賛成した。〝絶対に映画化すべきだ、もし、これが大ヒットしたなら、あなたの肖像が各国の貨幣になりますよ〟と、冗談とも本気ともつかず言ったことを憶えている。なぜなら、現在の日本の高度経済成長から起こっている種々の公害問題、そこから起こる異常現象、さらには、過密した人口問題、そして、それらは当然、食糧危機へと結びつき、今や日本が世界に先がけ、真っ先に人類の破局へと向ってころがり落ちているからである。

今日、東宝が、この作品をとりあげ、映画化したことは、人類滅亡を救うという一つの警鐘として、日本ばかりではなく、世界的に意義があることだと堅く信じている。このことは我々、映画人としても、今まで世話になってきた日本、ならびに社会に対し少しでも貢献できたら本望だし、また、できると確信している。

私自身、子供の頃から〝一九九九年　七の月　空から恐怖の大王が降ってくる〟というノストラダムスの予言を何かで知って、大変興味を持っていた。しかし、それが何であるかは判然としなかった。それが現在、水爆であるとも、世界ミサイル戦争であるとも、さらには公害であるとも言われているが、各界の学者の説によればこの一九九九年の二十五年後を待たずして日本は、滅亡する可能性が充分に秘められているという。日本の経済機構から見れば、農地が四〇%、保有食糧が一年分、大部分が海外からの輸入農産物に頼っているのが現状とされている今日、それらの輸入食糧が公害による異常気象などによって停止した場合、食糧危機が起こり、遂には予言とは関係なく、日本は十年、十五年後、それよりもっと早い時期にパニック状態が起こるかも知れない。今、この映画が封切られるということは、大へん幸いなことである。というのも、このまま、十年、十五年と経ってしまってからではもう遅い。もうどうにも止めようがないからである。しかし、現時点でならば、少しでもストップすることが出来るかも知れない。たとえストップ出来なくても、何かしらブレーキをかけ、あと二十五年で滅び去るという人類の寿命を、五〇年、百年先へと延ばせるのではないか。

いずれにしても、このように人類が過密状態になっていったのでは、人類の幸福が広げられるということは先行き望み薄である。それならば、一日でも、二日でも、先へ先へと人類の滅亡を押しやりながら、滅亡などと言われていることに対し、大手を広げて阻止し少しでも自然に還りながら、生きているということへの幸福感を味わいたいものだ。少なくとも我々の一人一人がそういう努力をしようではないか。



⑬世界ミサイル戦争

餓死するか？戦って死ぬか？…食糧危機は、遂にミサイル戦争を勃発させた。世界の各都市は死滅しても、なおかつ各国のミサイルは、オートマチックに発射され続けていた。すべて撃ち尽すまで……



⑫大森林，工場群の炎上

原子力発電所の事故は，太陽の紫外線直射によって枯れていた大森林を燃え上らせた。かつてないスケールの山火事は，工場群へも飛び火し，日本の産業をかい滅させた。



⑭ここに人間がいた…荒廃の関東平野

荒土になった関東平野。もう人間はいない。たとえいても生きられない。文明がもたらした荒廃なのか？人間が地球に生まれた時から持っていた宿命なのか？



北極海のArlis II浮遊基地から眺めた大雪氷原。



北氷洋の雪原に見られる大亀裂。どこまでも続いている。

写真資料■根本順吉氏

じまる時期はおそく、振幅が減少していく。

気温の低下が最も著しい場所は北極海中部にあるフランツ・ヨセフ島で、ここでは年平均気温が十年間に二度、冬だけの気温は実に五・七度も下っている。海底からのコアー・サンプル等によって古い時代の気候を推定してみると、氷河期と間氷期の間の気温の差はあまりにも小さいのに驚くのであるが、これにくらべるとフランツ・ヨセフ島の気温低下は著しい。数十年このような状態がつづけば、その場所は容易に氷河期と同じ条件になるであろう。

極地の寒冷化は一九六〇年代までは東半球側、すなわちシベリア北岸にかたよっていたが、七〇年代に入り、カナダ側の低下も著しくなってきた。極地の寒気の拡大にともなわれ、この寒気の周囲をめぐる寒帯前線帯は南下し、そのためイギリス付近では西風の吹く割合いが次第に減少していった。春に例年行なわれる大西洋横断のヨット・レースの気象条件もまるで変わってきた。

極地寒冷化の影響は寒帯前線帯を越え、さらにその南で地球をとりかこむ亜熱帯高気圧を南に変移せしめている。半球的にほぼ定常的に存在するこの高気圧圏内は晴天に恵まれているため、砂漠地帯となっているが、高気圧帯の南下にともなわれ、砂漠地帯が南に移ってゆく。この最も著しい例はアフリカのサハラ砂漠周辺にみられる。

サヘルとはアラビア語で岸辺を意味するが、北アフリカでは沿海の丘陵地帯を形成する地帯が、また熱帯アフリカではサハラ砂漠の南側の地域がサヘリアンにあたる。この南側のサヘリアンの地域に著しく干ばつ傾向がつづいている。サヘリアンはモリターニア、ニジェール河の湾曲部、チャド湖をへて、さらにハルツーム地方を含むスーダン中央部をへて紅海に達している が、年間雨量三百~五百ミリのこの地帯に著しい干ばつがつづいている。サヘル六ヶ国で二十五万、エチオピアでほぼこれと同数の餓死者が出ており、牛の被害は三五〇万頭に達している。国連事務総長のクルト・ヴァルトハイムは「おそらく今から世紀末までのうちに、砂漠の拡大の結果、アフリカの地図から三ヶ国ないし四ヶ国が消滅するおそれがある」とのべている。

日本付近はどうか。他の文明諸国にくらべ低緯度にあり、海にかこまれている島国の気候の変化は、他の地域より遅れ、六〇年代になってから寒冷化の傾向がはっきりしてきた。日本付近はまた世界有数の季節風地帯であるため、季節風の消長が、気候帯の移動に伴なわれた気候の変化を修飾することになる。山本武夫教授が歴史時代の気候を解析した結果明らかにしたことは日本の異常厳冬期は暖冬期にはさまれて突発的にあらわれるのに対し、夏の冷涼期と多雨期は長期にわたって継続していることである。一九五〇年代と六〇年代には日本では異常暖冬がつづいたが、世界気候の寒冷化がさらに進めば、淀川や隅田川が凍結したような十九世紀はじめの厳冬期をむかえることになるであろう、という。

異常気象や気候の変動の原因、またその将来の見通しについては様々な学説があり、必ずしも定説に定着しているわけではないが、現象そのものは、まぎれもない事実としてあらわれており、これが地球上にみちあふれた四〇億に近い人間の生活を構造的に大きく左右している。われわれは気候変動や異常気象の問題を学問的にほり下げていかねばならないが、他面、臨床的問題として、その影響までも含めて実態を正確に把握し対処してゆかねばならない。

カナダの気候学者ヘアーは「一九七二年のような年〔世界的に不作の年であった〕が三年以上つづけば、そのような状態に対して世の現在の人口が耐えうるとは思わない」とのべている。地球の寒冷化は、はじまって間もなく、早急にこの回復が望めぬとすれば、人類がこのような環境の悪化に対してむかえる危機は高々二十年以内のことであろう。われわれは重病の患者を放置するわけにはいかない。



現実としての異常気象

気象庁図書資料管理室
根本順吉



アイスランドの氷河の先端にできた氷河湖。

日本から見ると、地球のちょうど反対側にあたるチリのサンチヤゴでは今年〔一九七四〕のはじめの四十五日間に七五八・二ミリの雨が降った。サンチヤゴの年降水量は五一四ミリ、一月および二月の月降水量はそれぞれ九〇ミリだから、この雨がこの地域としてはきわめて稀な現象であることがわかる。四十五日間の最後の九日間には実に四六二ミリも降ったのである。

一九六九年の九月から十月にかけて、北アフリカのチュニジアでは断続的に強い雨が降り、この時はローマ時代につくられた石の橋が流された。だからおよそ二千年ぶりの大雨ということになる。死者六百、百万頭以上の牛、羊、ラクダが流され、一万本のオリーブが水につかった。この翌年、五月から六月にかけてはルーマニアを中心として大洪水があり、これらは現代のノアの洪水と言われた。

一九六三年一月の世界的な異常気象のときは、ポーランドのワルシャワで月平均気温が平年より十度も低く、反対にカムチャッカ北部では十二度も高くなった。今年のはじめ南極大陸の中央にあるボストク基地ではマイナス十八度になったが、この場所の一月平均気温はマイナス三十二度、したがって平年より十四度も高い高温が観測された。また南極大陸の沿岸部のエンダビーランドでは同じころプラス十七～八度という高温を観測した。今までの沿岸部における高温の記録プラス九・五度をはるかに上回る。

毎年、世界各地に起こっているこのような異常気象の例をあげることは容易であるが、その特長は異常気象の定義でいう三〇年に一回以下の稀な現象という、一応の定義をはるかに越えて、何百年、何千年、ものによっては何万年に一度という稀な状態として起こっていることである。

中国の研究者達のように、このような異常の起こることが、むしろ気候の常態であるという見方もある。しかしこれは病気をするのが、人間の常というようなもので、このような見方をしたからといって異常気象の正体が解明されたわけではない。病気がなぜ起こったかが問われるように、なぜ異常気象が起こったかがやはり問題になるであろう。

私は最近における異常気象は、気候が変わりめに来ていることの、一つの現われであると思う。あるいは反対に異常気象を伴いながら、気候は変っていくものと考えるのがよいのかもしれない。

前世紀の終わりから、今世紀の五〇年代にかけて、我われは気候的にみると、きわめて温暖な時代に生れた。この時期を十六世紀以来つづいた小氷期が終わったあとの後小氷期と考える人もいる。この恵まれた条件下で人口は増え、産業は盛んになり、食糧は増産された。

この温暖な時代も、一九五〇年代になって世界の寒冷化が明瞭になるにつれ不明瞭となり、以後気候の遷移期間に入ることになる。そして六〇年代の後半頃から、全球的な地球の寒冷期が明瞭になりはじめた。

温暖期、寒冷期および遷移期をそれぞれA、B、Cとすると、Cの期間はA、B両方の性質が共存する時期にあたる。AのレヴェルからみるとB非常に稀な状態も、Bのレヴェルからみる限り至極あたり前のことになる。何千年に一度という稀な現象はAというレヴェルから見る限り、そうなのであって、Bのレヴェルからみるなら、ごく普通の状態となる。

異常気象が目立っていることは、したがって、われわれをとり巻く気候条件が新しい体制に入りつつあることを意味している。それは今までのように恵まれた環境ではなく、自然条件としては、過酷なものである。中国の人達がいうのはこのような変化のあることを常態と見越して、自力更生によって増産にはげむということであろう。

現在、入りつつある寒冷期の実態と今後の見通しについて、次に考えてみよう。地球の寒冷化は高緯度（北緯五〇度以北）ほど顕著で、早い時期に始まっている。低緯度ほど寒冷化の[illegible]



❽アメリカ穀倉地帯に大洪水

米国中西部に集中豪雨が襲った。ロッキー山脈の鉄砲水に続くミシシッピー河のはん濫は穀倉地帯に大打撃をあたえ，米国は，食糧の輸出はおろか，自給もできなくなった。



❾マンモス・タンカー炎上

東京湾に緊急避難したマンモスタンカーが座礁炎上。東京湾はまたたくまに火の海となり，品川から工業地帯へ燃え広がった火は，やがて京浜工業地帯を全滅させた。



❿赤潮にむしばまれる瀕死の海

赤潮は，工場排水などによるプランクトンの大量死によって起る。赤い海は死の海である。餌を奪われた魚は死に，やがてすべての生命がなくなる。



⓫高速道路が一瞬にして火の海

大混乱の都市から脱出しようと，高速道路は殺到する車で身動きもできない。１台が火を吹くと，動くガソリンタンクは連鎖的に爆発を起こした。高速道路は火の帯となって東京を包む。



❻熱帯の海が氷結を始める

熱帯の空は，厚いスモッグの雲で覆われていた。それは，太陽の光と熱を奪い，熱帯を極寒の地に変えた。海は急激に氷結を始め，氷海に閉じ込められている船が続出した。



❹ニューギニアに異常事態

原子灰が最も多量に降下したのは，地球上で２番目に大きい島，南太平洋のニューギニアだった。国連の第１次調査団は全滅。第２次調査団も，想像を絶する異常事態に直面した。



❺北極海の氷山が急激に融解

成層圏で続発したＳＳＴの事故。そのため，地球を覆っていたオゾン帯が破壊された。強烈な太陽の紫外線は地表を直射，動物は灼けただれ，氷山は溶け，海洋の水位は急上昇した。



❼大空が巨大な鏡に変化

公害物質が充満した東京の空は、全体が反射鏡となり、東京の街を写した。頭上を圧迫するように、逆さまな、青緑色の街が覆いかぶさり、発狂する都民が続出した。



新しい宅造は自然の多様性，多彩な生物社会の画一化・貧化を強要している。



日本のＧＮＰ成長を支えた東京湾沿いの産業立地。この奥のスモッグの中に2.000万人の人たちが住んでいる。

写真資料■宮脇 昭氏

険状態に陥る。では四〇代以上の人は成長をストップしてよいのではない。量的成長から知識や経験を豊富にする方向への質的成長に転化し得た者のみが精神的にも肉体的にも健全に生き残る。

わが国の経済成長、都市や産業立地の膨張、自然の利用も、今や量的成長から質的成長への転換期にさしかかっている。もし、万物の霊長と自負する人間が、除草を止めた畑の雑草群落が半年後には大繁茂するが、三年後にはススキやネザサ類の群落におきかえられて一本もなくなるとおなじ愚かさを繰り返さないためには、今こそ、私たちは最高条件をもとめ、邪魔者を皆殺しする文明や技術から方向転換をしなければならない。

もし人間がバッタや雑草とおなじように自己規制を働かせなかったらどうなるか。もし人類滅亡をテーマに映画をつくるなら自分だけは死なないと過信している私たち人間に人類の滅亡をきたさないための具体的な警告として多くのことを示さなければならない。

以上は年末の寒い日の夜、新宿の宿で東宝の田中友幸、田中収プロデューサー、舛田利雄監督、脚本家の八住利雄さんをはじめスタッフの方々にスライドを使用しながら話したあらましである。

映画は見ても、どのようなプロセスを経て、どのような人種？　がつくるのかまったく知らなかった私は、新宿の一夜が忘れられない。スタッフ一同の熱心さに小さな畳の部屋は熱気に満ちていた。とくにギサギサの長髪の間からランランと光る舛田監督の眼を見たときに、仕事に打ち込む人間のこわいような美しさに魅せられた。

このような人たちによって作られた「ノストラダムスの大予言」は私のささやかな願いを入れて、単なる見せ物映画でなく、現代に生きるすべての人間が、それぞれの立場、能力に応じて、どのようにして生きのびることができるか、そして、生きることとの幸福をしみじみと教えてくれる。人間にもっとも深い感動を与えてくれるものは単なるスペクタクルや人工、自然の変化や美しさだけではなく、人間であり、人間くささであると、植物屋であるにもかかわらず私は過去の経験から信じている。

環境破壊による生物社会の破滅のプロセスの第一期症状は下克上である。一本の観光道路によって、多いときには一万数千本の大木が枯れた富士山の例を見るまでもなく、一番威張っている、一番競争力の強いものが最初に親子とも大量死する。しかも、生物社会と環境のバランスがくずれたときには森林に例をとると大木の死に方のオンパレードである。この映画がつくられるときにも、ではどのようにして人類の破局は訪れるか、が一番問題になった。環境の質を変えるほど自然環境が破壊されたとき、そこにはあらゆる死に方が一度に噴き出す。

かつて、鎮守の森や屋敷林、裏山のふるさとの森と共存して二千年来このかぎられた島国で固有の文化をきずいてきた日本人は、もっとも見事に緑の自然と共存してきた世界たぐいない民族であった。砂漠化した西欧の文明の中心地メソポタミア、エジプト、アテネとくらべて見るとき、日本の古都奈良、京都、鎌倉は今日までもっとも自然と共存した都市を形成している。

人間の本質的共存者を失い、破壊しつくした産業立地、大都市、新都市づくりの現状を見るとき、日本人が、人類が健全に明日を生きのびるために、ぜひ多くの方々がこの映画を見て、古くて新しい、間違いのない生き方を考えて戴きたい。

人類は滅亡するか

植物社会学者
宮脇　昭





富士山スバルライン沿いのシラビソの枯死状態。１本の道路によって生物社会と環境のバランスがくずれると大木の死に方のオンパレードだ〔富士スバルライン海抜2.100M〕

たしか昨年の十一月頃、東宝の田中収プロデューサーから突然の電話を受けた。「あなたは植物社会の破たんについて研究しているそうだが、人類も滅亡すると思うか。滅亡するとすればどのような滅亡のしかたをするか。ぜひ一夜教えて欲しい」。私はこの程度の自然破壊や公害で三十七億の世界の人類も、一億数千万人の日本人も、すぐに絶滅することはない。しかし、このまま人間が彼等のせつな的欲望や機能的便利さだけを追って、自然の多様性を画一化し、貧化したなら、すべての生きものは生命力や抵抗力を失い、ほんのわずかな自然のわりもどしによっても局地的大量死は近い将来にある。すでに新しい技術と莫大な資金を集中投資してつくった、本来もっとも快適に生活ができるはずの東京湾ぞい、大阪湾ぞいでは数千年来の人間の共存者であったモミノキもアカマツも、ホタルゲンゴロウもあっという間に消滅している。

最近の公害や自然破壊は実は三百万年この方の自然と対決し、じゃまものは皆殺しにして、たとえせつな的でも人間だけがよりよい生活をしようとした自然との対決思想から、自分が健全に生きのびるためには、いやな奴とも我まんしながら共存しなければならない。対決から共存への意識の変革を、私たちに強要している。

我々は人間の技術を過信してはならない。死んだ材料やエネルギーを変形しての工場製品づくり、原子爆弾から大都市や医療器具まで、大量・画一生産は新しい技術や文明をつくりだすことができる。また、時間をストップした現在の我々のあらゆる欲望を満足させてくれるところまで進んできているかも知れない。しかし、今日も明日も健全に生きのびることの保証については今日の科学も医学もあまりにもまだ不十分である。世界中の金と科学・技術を全部集めても、人間はまだ一本の雑草も一匹の虫ケラも死んだものを生きかえらすことはできない。世界中の金と医者を全部集めても三〇数億人の人間の中のたった一人も千年はおろか五百年生かすこともできない。

このような生命の冷厳な事実が、ともすれば目さきのあやしい欲望や打算に目がくらみ、誰一人として、死の瞬間まで、どれほど公害がひどくなろうとも木の緑の自然が消滅するまで、まさか自分が死ぬるとは思っていない。

しかし、庭の雑草群落でも異常発生したバッタの大群でも生物社会では三〇数億年の生命の歴史が支えた生態学的な自然コントロールによって種族の滅亡を防ごうとする。それは局地的な大量死である。自然界では、すべての生物社会は最適条件をこえて、せつな的な最高条件に達するとき、いや、そのはるか前で大量死という大公害作戦によって種族の滅亡をのがれる。

田舎のきびしい環境に育った私は、子供の頃「踏まれても忍べ道の草」という諺を机の前に貼っていた。しかし、二〇年間の植物社会、雑草群落と環境についての調査結果から確実にいえることは、路上やグラウンド上のオオバコ群落は、ある程度人に踏まれているきびしい条件が、より競走力の強い路傍のチガヤやブタクサにその生育場を侵されない最適条件なのである。

すべての生物も、生物社会もその生長・発展の過程はS字状カーブをつくる。個人の生長も畑の雑草群落も第二次大戦後の日本の社会も、はじめの間はゆるやかにしか生長しない、あるいはしなかった。しかし、ある程度周囲の条件がととのうと急速な量的発展をとげる。一〇代二〇代の若者や昭和三〇年代から最近までの日本の経済成長のように！　四〇代、五〇代の人間がさらに量的成長をするとすれば肥大成長しかなく、体重がふえて、ふとりすぎて生命の危



Catastrophe 1999

人類滅亡への 14大スペクタクル・シーン



❶東京に突然変異の動物が群生

たん白質防腐剤ＡＦ２の影響か？夢の島附近に異常動物が群生。自衛隊の火炎放射部隊が出動し、懸命の焼滅作戦を展開したが……これが地球異変の始まりだった。



❸原子灰が各地に集中降下

大気圏内に蓄積された原子灰は，ジェット気流に乗って，世界各地に集中降下し始めた。大量の放射能汚染によって，動物，植物に集団突然変異が続発，人類の暗い未来を暗示した。



❷地下鉄，ジャングルに

厚いスモッグに覆われ，暗い，寒い日が続いた或る日，突然，地下鉄のトンネルに，カビ状の巨大な植物が発生した。

ノストラダムスとその著書「諸世紀」



ミシェル・ド・ノストラダムスは、一五〇三年に生まれ、一五六六年に死んだフランスの医者である。日本でいえば足利時代の末期から織田信長の活動の初期のころまで生きていたことになる。

教育を受けたのはモンペリエ大学で、子供のころから神童のほまれが高く、この大学でも開校以来の天才といわれた。

彼の住んでいたサロンという町には当時ペストが大流行し、ノストラダムスの妻アドリエットと二人の愛児もその悪疫の犠牲となった。そのショックもあって医師としての彼はペストの治療に全力を傾け、見事この疫病を全滅した。その時、「やがてこのような治療法はパスツールによって平常のものになるであろう」と語ったといわれるが、その言葉どおり三百年後パスツールの出現とともにそれは実現した。

ノストラダムスが死後四百年以上も経つ今日でも有名なのは、医師としての業績よりも「大予言者」としての方である。

サロンの町での予言があまりにも的中するために、その名前はついに宮中にまで聞え、当時の国王アンリー二世に召し出されて数年の宮延生活を送るようになるが、晩年はふたたびサロンの町で過している。

そして彼が生前に、自分で書いた唯一の著書が「諸世紀」である。各章おのおの百篇ずつの四行詩による十二巻の構成だが、木版で二百部しか印刷されなかったせいか、現存しているのは二冊、しかも二冊とも本来千二百篇あるべき筈の四行詩が五百篇ほど紛失している。

この「諸世紀」に収められた現存七百篇の四行詩がほとんど百%的中しているという大予言なのである。

文豪ゲーテは、そのあまりの的中に驚き「ファウスト」を書いたといわれ、事実、名作「ファウスト」の中にも〝それ脱け出せ、広く開かれた世界へ、ここに神秘にみちた本がある。ノストラダムスが手ずから誌した、かの偉大なる本だ。おまえの、これからの案内役としては、この本が一冊あれば十分ではないか〟と書いている。

ノストラダムスの「諸世紀」の研究は日本よりも外国が盛んで、数多くの科学者が現在も全世界でその研究を続けている。

一九九九の年七の月
空から恐怖の大王が降ってくるだろう
アンゴルモアの大王を復活させるために
その前後の期間　マルスは幸福の名のもとに支配するだろう

人類滅亡の予言といわれるこの四行詩は、「諸世紀」の第一〇章第七二篇に収められている。





線を反射、地球は急速に冷え出したのだ。東南アジアに起った大旱魃は一千万人近い人々を餓死線上にさまよわせていた。

成層圏に蓄積した原子灰が、ジェット気流にのり、ニューギニア地方に集中的に落ちた形跡があった。異常現象調査のため派遣された国連調査団は全員消息不明となってしまった。良玄も参加して捜索、救出のため第二次派遣団が編成され、ポートモレスビーへと出発することになった。

現地に到着した調査団の目に映ったのは、死のジャングルであった。緑の木々は一変して茶色の枯木となっていた。巨大な肉食樹、大コウモリの襲来、豪雨のように襲う大蛭の大群——これらは放射能汚染による動植物の異変としか考えられない。ケロイドでイビツに歪み、体の皮膚はその上にコケのようなものが生えている原住民の奇怪な姿。しかも血に餓えた彼等は調査団に襲いかかり、調査団との間に死闘が演じられ、この世の地獄図絵がくりひろげられた。信じられないことに、襲って来た原住民の中に、野獣と化した良玄の弟子大根の変り果てた姿があった。

空では成層圏を飛行中のSSTのエンジンが突然爆発し、オゾン帯を破壊し、太陽の紫外線が地表を直射、白光が閃き、風景が白くすっとぶ。人人は本能的に影の部分に逃げこむが、男女の顔や露出した腕の皮膚は赤く焼け、わずかにただれている者もいる。

街路樹はみるみる赤茶けた色に焼けてゆき森林も赤褐色に変形し、北極では氷山が溶けだしおびただしい流氷がアイスランド沖を南下し始める。沼沢地は干上り、東京の街にも突如猛烈な土砂降りの雨が降り始める。米国ミシシッピー流域は大洪水に襲われ穀倉地帯全滅、カナダ五大湖の氾濫による小麦宝庫地帯の潰滅状態等のニュースに加えて、オーストラリア、ソヴィエトも異常高温の旱魃による世界の主要食糧生産国はほぼ全滅の状態となる。都市は完全なパニック状態となり食糧確保のため群集は、食糧倉庫やスーパーマーケットを襲う。狂乱の下界の騒動に呼応するかの如く、太陽が濃いスモッグに被われて、青緑色に変り、街全体が青緑色になってゆく。その変色した街の上に、百八十度逆転した東京の街が空に映っている。不吉な天変地異の前ぶれとしか思えないような現象が相つぎ人心は不安、動揺、紊乱の極に達している。

その他、津波、地震、火山爆発など、世界各地で起こりつつある現象は、すべて一つの方向を指していた——人類滅亡——それは或る日突然やって来た。思いもかけぬ恐るべき事件が全世界に起こり、地球は火だるまとなって滅びていった。

わずかに東京と分る、見渡すかぎりの瓦礫と化した廃墟。もそもそと地中からはい出して来る異様な軟体動物。

それは、人間のなれの果てなのだろうか？

また、人類のあとを継ぐ新しい生物なのだろうか？









Catastrophe-1999

ものがたり

東京の街中にある、西山環境研究所。所長の西山良玄は今日も若い所員を指揮して、大気汚染の分析にとりくんでいる。そこへ、夢の島にへんな動物発生！の報らせがあり部屋をとび出した。現場では自衛隊員が出動し火焔放射器による大規模な焼打ち作戦が進行していた。

「キャッー！」同行の娘まり子の恐怖の声で一同がその場でみたものは、長さ三十糎もある無気味な大ナメクジであった。

その夜、大ナメクジ発生の原因について、良玄は、我々の食物の中に使用されている蛋白質防腐剤ＡＦ２が影響しているかも知れない。また「大気中には既に五千万トンもの汚染物質が充満している。これが限界に達し何かが引金となって、どっと降り落ちる事だって考えられなくはない、そうなると、東京は、いや、日本中がアフリカの砂漠のように死にたえてしまう……」と高度成長経済の遺産である公害の深刻さを説く。

良玄の企業に対する容赦ない公害摘発の態度に対しての報復も始まった。所員のなかには企業側の卑劣な脅迫に耐えきれず、研究所をさるものもあらわれてきた。工場排水の採取も企業内労組員達の妨害で困難になってきた。しかしこのまま自然破壊や大気汚染が進めば、異常気象の原因ともなり、旱魃や冷害、洪水を招き人口増加に伴う深刻な食糧危機となる。地球破滅、人類滅亡の日はノストラダムスの予言通り確実に近い将来現実のものとなる！良玄は学者の立場から、精力的にそのことを訴え続けた。

良玄の娘まり子は、報道キャメラマンの中川と将来を誓い合っていた。中川の故郷は豊かな漁村で父はその漁協の組合長として平和な暮しが続いていたが、ある日突然襲来した茶褐色の帯——赤潮の発生は一夜にして豊かな海の資源を全滅させてしまった。漁夫達は怒りと悲しみと絶望の中で自殺しようとする者まで現われだした。

ある地方では奇型児出産率が三〇％を超えた。植物人間や人間が縮んでしまう新しいクル病の発生。一夜にして大発生した未知の雑草とその被害。一つの能力が異常に発達した子供の出現。例えば歩いてはいるのだが、物凄いスピードで走る子供。ジャンプ力のみ異常に増大した女の子。電子計算機に劣らぬ計算能力をもつ幼児……等、異常で奇怪な事件や現象が日本各地で起り始めていた。閣僚のひとり開発大臣はノイローゼが昂じて狂い出してしまい、自宅の松の木の上で痴呆のような状態になるありさまであった。

一方、世界を襲う異常気象は——

エジプトのピラミッドに吹雪が舞い、大洋がみるみる氷結して巨大客船を氷でとざしてしまった。蓄積されたスモッグは、厚い層雲となり太陽光









—スタッフ—

特別スタッフ

- 異常気象……根本順吉
- 植物社会学……宮脇昭
- 超科学現象……斎藤守弘
- 食生態学……西丸震哉
- 作家……半村良
- 作家……石川喬司

スタッフ

- 製作……田中友幸
- 〃……田中収
- 構成・脚本……八住利雄
- 潤色……舛田利雄
- 〃……坂野義光
- 特技監督……中野昭慶
- 協力監督……坂野義光
- 監督……舛田利雄
- 撮影……西垣六郎
- 〃……鷲尾馨
- 美術……村木与四郎
- 録音……増尾鼎
- 照明……小島真二
- 音楽……富田勲
- 整音……東宝録音センター
- 編集……小川信夫
- スチール……石月美徳
- 監督助手……岡田文亮
- 製作担当者……村上久之

特殊技術スタッフ

- 撮影……富岡素敬
- 〃……山本武
- 美術……井上泰幸
- 照明……池田泰平
- スチール……田中一清
- 監督助手……川北紘一
- 製作担当者……篠田啓助

—キャスト—

- 西山良玄・玄哲・玄学……丹波哲郎
- 中川明……黒沢年男
- 西山伸枝〔良玄の妻〕……司葉子
- 西山まり子〔良玄の娘〕……由美かおる
- おりん〔玄哲の妻〕……谷口香
- 玄武〔玄哲の子供〕……田遠実
- 隠密〔1〕……久野四郎
- 〃〔2〕……原田君事
- 〃〔3〕……小笠原剛
- 柏尾憲兵少佐……青木義朗
- 大根……竜崎勝
- 吉浜……佐々木勝彦
- 井原……武藤章生
- 木田……浜村純
- その妻……音羽久米子
- 娘……麻里とも恵
- 娘の夫……鳥居功靖
- 自衛隊・隊長……下川辰平
- 植物学者……平田昭彦
- 動物学者……小泉博
- 四国のバスガイド……加藤小代子
- 組合長・三治……平田未喜三
- 妻・勝子……中村たつ
- 病院・院長……志村喬
- 田山……谷村昌彦
- 浜子〔田山の妻〕……稲村和子
- 学者A……加藤和夫
- 〃B……渥美国泰
- 〃C……北沢彪
- 〃D……雪丘恵介
- A国代表……ジョージ・F・フリム
- 黒人代表……ウィリー・ドーシー
- ニューギニア調査隊員〔1〕……セテラ・トニー
- 〃〔2〕……ロルフ・ジェッター
- 〃〔3〕……フランツ・グルーバー
- 〃〔4〕……ライナー・ゲッシュマン
- 警官〔A〕……鈴木治夫
- 〃〔B〕……青木敏夫
- 軟体人間……杉井勇
- 〃……中野宣之
- 総理大臣……山村聡
- 開発大臣……瀬良庄太郎
- 環境庁長官……鈴木瑞穂
- 官房長官……内藤武敏
- ナレーター……岸田今日子

不気味な実感とともに

特殊技術監督
中野昭慶

超紫外線の直射によって、みる〱茶褐色に変色してゆく街路樹や緑の山なみ――この映画の一場面であるが、大気中の有害物質や、地中の毒物によって枯れた樹木を見馴れている私にとって、そう驚くほどの場面ではないと思ったのが間違いであった。

先ず、緑を変色させるのに、塗料を使ったのでは現実感がないので、自然に枯れてゆくのを待つことにした。しかし、十日も二十日も待つわけにはいかない。短時間で自然に枯らすには……そこで思いついたのが毒性のありそうな化学薬品であった。塩酸、硫酸、硝酸、アンモニア等にヒムロ杉の苗木の根を浸して、緑の葉が枯れてゆくのを待つことにした。貴重な苗木をこんな風に扱うのはいささか残酷に思えたが仕方がない。罪の意識に苛まれ乍ら、四十五時間待ったが、一向に変色のきざしはない。遂に三日間放置したが、緑は依然として緑であった。根と茎は完全に枯れて真っ黒になっているのだが、葉は鮮かな緑のままであった。この驚ぐべき緑の生命力に、私は唖然となったのである。あらゆる生命の源である緑なればこその強さであろう。今、人間は、その緑を枯らすほどの猛毒を空中に、地中にばらまいているのだ。ノストラダムスの予言が身にしみた一瞬であった。

そんな折も折、此の間は実際に硫酸の雨が降ってきた。あれがもし、濃硫酸に匹敵する濃度であったなら、葉っぱの緑は枯れなくても人間の皮膚は焼けただれ、それこそ茶褐色に変色してしまったろう。

全人類が滅亡するなどということは誰も信用しないかもしれない。しかし、「大予言」がこれだけ話題になるのは、そんな予感のする出来事が現実に頻繁に起こっているからではないだろうか。異常気象による天変地異はどんなことが起こるか想像もつかない。今回の特撮の見世場はその異常気象と核爆発であった。私自身何か不気味な実感をもって撮り終えたのである。

今こそ英知を

監督
舛田利雄

結婚した頃、僕は妻に子供は作らないよと言っていた。原爆の後、水爆が出来て、その実験に世の中が騒然としている時だった。青年の僕は本当にこわかった。人間にもいろんな種類がいる。核をあつかう人間の中に、ひょっとしたらおかしいのが居るかもしれない。又いくら万全を期しても人間のやる事だ、いつ、どこで、過失による爆発が起きるかもしれない。こんな恐怖の充満している世界は、俺だけで沢山で、きっと可愛いであろう我が子を生み出すなんて、とんでもないとかたく思っていた。それが、今や人並みに家庭を作り、成人した息子、娘と口喧嘩などしながら、ぼんやりと高度成長社会と言う中で太平な日々を送っている、全く変り果てた我が姿であります。ちょっと考えて見れば、今の時代の怖ろしさは、その当時とは比較にもならない程なのに……分ってはいても、実感として生きていない、その人間のゴウのようなものが、本当は一番怖ろしいと思います。

この映画を演出するにあたり、僕はごく普通の男なので、大予言などというオカルトの世界は信じ切れないのですが、ドロ縄式にいろんな本を読み、学者識者の話を聞き、現在私達の生きている地球が、その中でも特に日本が如何に悪い方向への急斜面を転がり落ちているかを知り、慄然としました。その怖ろしさの実感を少しでも観客の皆さん方に分って頂きたいと思ったのです。

劇映画ですので、多少の誇張はありますが、基本的な姿は歪めてない積りです。

映画の中の主人公も繰り返し言っているように、人間が作ったものに人間が犯されている事の愚かさ、何とも納得し難い現在という時代を、見直して頂ければ有難いと思います。そして、一人一人がなんとかしなければいかん、それも今のうちに、と考えて頂ければと願っております。





かいせつ

これは、人類の滅亡を真正面から捉えた、壮大な恐怖ロマンである。

自らの手で自らを滅ぼしてゆく人類。その姿は、特別スタッフ〔各界のトップ科学者により構成〕のアドバイスにより、科学的に裏打ちされた映像で描かれる。特撮は「日本沈没」の中野昭慶が、更に重厚に、更に夢幻に、恐怖の画面を積み重ねてゆく。

〝今なら遅くはない！〟滅亡に向いつつある人類に、これは激しい警鐘を打ち鳴らす超大作である。

原作は、既に一四〇万部を売り尽し、更におとろえをしらぬ売れ行きを示している大べストセラー『ノストラダムスの大予言』。

文豪ゲーテは、名作「ファウスト」の中でこう書いている〝それ脱け出せ、広く開かれた世界へ、ここに神秘にみちた本がある。ノストラダムスが手ずから誌した、かの偉大なる本だ。おまえの、これからの案内役としては、この本が一冊あれば十分ではないか〟













「大予言」の今日性

製作者　田中友幸

「大予言」を映画化したいと考えた第一の理由は、一九九九年に人類が滅亡するという"大予言"の今日的な意味であります。

人間が自ら築き上げた文明と科学のために亡びるという現代的なテーマに大変興味を持ったわけです。

滅亡の原因は何か？

水爆戦争、公害、異常気象、惑星の地球衝突などいろいろの説がありますが、それらの起こり得べき可能性を、科学的根拠にもとづいてスペクタクルにもり上げ「日本沈没」に続いて更にそれを上廻わる特撮技術を完成させて日本映画の新しいジャンルを切り開いて行きたいというのが私の念願です。

「大予言」は、あくまで一〇〇パーセント観客にサービスする超大型のスペクタクル娯楽作品ですが、テーマが社会的大問題であるだけに、極めて慎重に扱わなければなりません。そのため脚本づくりにあたっては、多くの専門家の意見を聞き、科学者や作家の方々に特別スタッフとして協力をお願いしました。

またわれわれスタッフも製作にあたり専門家の諸先生から基礎知識としていろいろご意見を伺いましたが、その実体というものはまことに驚愕の一語につき、人類は本当にこれでよいのか？と痛感したわけです。

この映画に対するわれわれの製作姿勢は、単なる予言のための予言映画ではなく、あくまで科学的なデーターをふまえたものでなければなりません。

あり得るかも知れぬ未来の危機を描くことで、危険な曲り角にさしかかっている現代文明に、一つの警鐘を打ち鳴らしたい。

娯楽性の中に今日的なテーマを生かし、この映画を面白く見終った人々が、人間の未来のあり方について、何ものかを感じ、考えてもらえれば望外の喜びです。

人類は、果して地球上に生き残ることが出来るのだろうか？

無関心の罪

脚本家　八住利雄

ノストラダムスが大予言者であったということは、間違いのない事実である。彼の数々の予言は、彼が生きていた四百年前から今日までの歴史の上で、多くの事実となって現われている。

しかし、「一九九九年の七の月に恐怖の大王が降りて来て、地球が滅亡する」というノストラダムスの予言を、私はそのまま信じているわけではない。そんな予言を事実にさせないために、この映画が製作されるのだと言えるだろう。

ということは、一方に於て、このまま放っておいたら人類の全滅は近いという現象が数限りなく、存在しているからである。それは公害その他である。

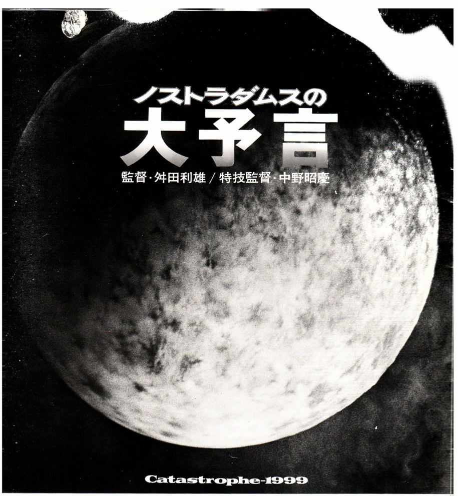
その他という中には核戦争もあるが、私は、核戦争が起こるとは思っていない。誰が何と言おうとも、人類の英知というものを信ずるからである。

しかし、わが国の公害問題だけに限って考えてみても、それは全く背筋が寒くなるような恐ろしさに満ちている。私は脚本を書く前に、専門の先生たちにいろいろの話を聞いたが、科学者たちほど、わが国の前途というものに対して悲観的であった。

わが国で経済高度成長がとなえられてから、まだ僅かな年月しか経っていない。が、GNPはおどろくべき伸びを見せた。いろいろの公害は、その必然的な結果である。

経済高度政策をとったのは政治家たちだが、そのような政治を許したのは、結局、人間の物質的な欲望である。それがここまで来て、人間自身の無限の欲望がその結果に復讐されているわけである。

もっとも公害というものは、高度成長政策以前からあった。そして又、私たちが光化学スモッグによって、公害を身近なものに感じはじめた以前に、たとえばミナマタ病はすでに存在していた。ただ私たちが無感心だっただけである。この映画が現在もつづいているその無関心をうち破るきっかけになってくれたら、ありがたい。







〈製作〉東宝映像株式会社・株式会社東宝映画〈配給〉東宝株式会社

恐怖の書か！救世の書か！

〝諸世紀〟とは、ノストラダムスが『この中に世界の未来がぜんぶある』と、言い残した予言集。
五島勉著の〝ノストラダムスの大予言〟は、この予言集を解き明かし、
恐るべき人類の未来を、世に問いかけたものである。



150
万部突破
7月31日現在

戦後15冊めのミリオンセラー

●第2弾、早くもベストセラー！

●迫りくる一九九九年七の月、人類滅亡の日！

ノストラダムスの大予言

五島 勉 —— ¥530

この恐怖の予言を人類の英知で覆せるか⁉ 文豪ゲーテも「ファウスト」で〝偉大〟と絶賛した的中率99％の予言が現代社会へ警告‼



◆森村誠一氏評……

一読して、背すじが寒くなった。まさに空前絶後の大予言集であり、恐しいことばかりで、それが、すべて的中している。

●地球は冷え、乾き、人々の飢えは近い！

実説 大予言

最新刊

五島 勉 食生態学者 西丸震哉 ¥550

『ノストラダムスの大予言』で日本中に警鐘を鳴らした五島勉が西丸震哉とともに〝その人類滅亡の予言〟を科学的に解明‼

発行 祥伝社 NON BOOK 発売 小学館


mil
sept mois,
u ciel viendra
frayeur,
Resusciter le gra
mois,
Avant apres. Mars
heur.